

平成 19 年度最終報告書

(様式 10)

被助成者 特定非営利活動法人 シャプラニール＝市民による海外協力の会 印

コード番号	07-A-227
-------	----------

実施事業名 バングラデシュ・ダッカ市における少女ドメスティックワーカー支援活動

～家事使用人として働く少女の問題解決に向けての取組み～

助成期間 平成 19 年 11 月 1 日～平成 20 年 11 月 1 日

<報告要旨>

本事業は、都市における子どもたち、特に女子の家事使用人のための支援活動を行う。少女たちは家庭内で非常に安い賃金または無給での長時間労働を強いられ、時間や移動の自由もなく、雇い主による性的なものを含む様々な暴力の被害に遭うケースが多い。また、バングラデシュにおいてこの問題について取り組んでいる NGO はほとんどなく、本活動はその意味で先駆的で実験的な取組みである。活動の柱は、支援センターの設立と運営で、現地 NGO 「Phulki (フルキ)」をパートナーとして実施した。

支援センターは、昨年度開設した集合住宅内 (パイクパラ・センター) やスラムの中 (コライル・センター) の 2 カ所に加え、新たに一般住宅地 (ルプノゴル・センター) に開設し、計 3 カ所の運営を行った。支援センターでは主に「教育セッション」、「スキルトレーニング」、「レクリエーション活動」の 3 つを行っているが、今年度からは一連の教育カリキュラムが修了した者には縫製トレーニングの機会を提供する、雇い主への貯蓄勸奨を行うなど、活動内容の充実を図ってきた。

また、この問題をより多くの人々に周知し、取組みが先駆的であることを伝え、意識を喚起していくために新聞等のメディアに少女たちの生の声や実績を記事として掲載してもらえよう働きかけを行った。訪問した新聞社 7 社においては全社から少女たちの記事掲載の同意を得ることができ、バングラデシュ社会における問題顕在化の土台を形成することができた。新聞に掲載するコンテンツを作り上げることまでは出来なかったが、今後は協力的な雇い主や少女たちが書いた文章を提供し、掲載してもらえよう継続して働きかけるとともに、テレビ関係への働きかけも行っていく。

【活動の目的】

都市における子どもたち、特に女子が適切な保護を受けられるように支援活動を行う。男子はバザールや路上で働くケースが多いため、フィールドワーカーと接点を持ち保護を受ける機会を得やすいが、女子はその多くが家事使用人など個別の家庭内の仕事に従事している例が多く、ストリート・アプローチ、すなわちフィールドワークの死角に追いやられがちである。シャプラニールと現地 NGO 「Phulki (フルキ)」(本事業のパートナー) の 2005 年 11 月に実施されたドメスティックワーカー (家事使用人) を対象にした合同調査によると、少女たちが密室に近い家庭内で非常に安い賃金または無給での長時間労働を強いられ、時間や移動の自由もなく、教育を受ける機会も奪われており、雇い主による性的なものを含む様々な暴力の被害に遭うケースも多いことがわかった。また、バングラデシュにおいてこの問題について取り組んでいる NGO はほとんどない。本活動はその意味で先駆的で実験的な取組みだと言える。

【活動の内容と方法】

現地 NGO「Phulki（フルキ）」とシャプラニールが協働して本事業を行なう。具体的には下記の活動を行う。

- I. 支援センター：集合住宅内やスラムの中に複数個所の支援センターを開設する。子どもたちが地域住民の協力も得ながら特定の場所を確保し、緊急時の駆け込み寺として機能するようにするほか、年齢に応じて保健衛生に関する基礎的な教育や簡単な技術研修の機会も提供する。
- II. ワークショップ：地域住民や、少女たちの女性雇用主を対象としたワークショップを実施する。支援センターでの技術研修などに少女ドメスティックワーカーが参加することを認めてもらうための下地を作ると同時に、その成果を確認するための場とする。さらに少女の親や保護者とのワークショップも状況に応じて実施する。
- III. 記録と文書化：すべての試行錯誤のプロセス、直面した課題や対応策等を記録、文書化し、広くバングラデシュ社会に還元することで、問題の顕在化を図る。また国内外の関係機関とも連携を進める。

【活動の実施経過および活動の成果】

I. 支援センター

既存の2カ所のセンターに加え、新たに1カ所（ルプノゴル・センター）を開設。計3カ所の支援センターを継続的に運営した。

- ① コライル・センター：2006年8月1日開設。コライル・センターは、首都ダッカ市内でも最大規模と言われるコライル・スラム内にあり、親と同居しながら「通い」で働いている少女たちがメインターゲット。
- ② パイクパラ・センター：2006年12月6日開設。パイクパラは政府の職員住宅がある地区で、少女たちは単身・住み込みで働いている。
- ③ ルプノゴル・センター：2008年7月7日開設。中流階級の多い一般住宅地で、スラム、公務員住宅地以上に設置が難しい地域環境であったが、地元自治会の協力を得て開設。2008年10月時点で12名の少女たちが通っている。地域での家庭訪問を続け、今後次第にセンターに通う少女の数も増えていく見込み。

【活動内容】

支援センターでは、昨年度来実施してきた(1)「教育セッション(基礎的な読み書き、マナー教育、保健衛生、栄養、性教育等)」、(2)「スキルトレーニング(家事、アイロン掛け、刺しゅう、料理講習等)」、(3)「レクリエーション活動」に加え、2008年4月からは(4)「貯蓄勸奨」の活動を新たに開始するとともに、教育カリキュラムを一通り修了した少女については、ミシンを使った(5)「縫製トレーニング」を受けることができる取組みも開始した。

支援センターに通う少女たちの人数は、結婚して村に帰るなど、常に入れ替わりがあるため増減はあるが、コライル・センターでは常時約40人、パイクパラ・センターでは15～25人、ルプノゴルでは7～12名程度の少女たちがセンターに通っている(センター開設後の延べで見た場合、159名の少女がセンターで学び、42人が一連のカリキュラムを修了した)。

少女たちの中にはセンターで学んだことを働いている先だけではなく、自身の家庭で実践する者も多く、雇用主だけでなく彼女たちの家族にとってもプラスの影響がもたらされる結果となっている。このことによって雇用主の評価が上がり、より積極的に活動に参加してくれるようになるとともに、少女たちも自信を深めて仕事に活かしていく、という良い循環が見られる。しかしその一方、働きぶりが良いため却って仕事量が増える、というジレンマも抱えているため、スタッフの家庭訪問等の機会を利用して対応している。

それぞれの活動における具体的な取組み内容とその成果については以下の通りである。

(1)教育セッション

基礎的な読み書き: コライル・センター、パイクパラ・センターともに継続して通っている少女たちは読み書きの能力が向上してきている。自分や家族の名前と住所、特定の単語で短い文章の作成等ができ、中には手紙が書けるようになってきている少女もいる。また、四則演算のトレーニングも実施中である。

マナー教育: 良いマナーを身につけることによるメリット、悪いマナーのデメリット、嘘をつかないことや時間に正確であることの大切さ、雇用主・子ども・来客等の相手に応じた振舞い方、言葉遣い等について学ぶセッションを実施。これにより、少女たちがスラングを使ったり、言い争いをする頻度が減ってきている。

保健衛生: 清潔な水を使うことの重要性、これを得るための方法、食器等の取り扱い方、清潔な衣服を身につけ、身だしなみを整えること等について繰り返し学習。清潔さを保つことが習慣となりつつあり、水の入手元や下痢等の予防対策について人に説明できるようになっている。

栄養: ビタミンや鉄分摂取の効用とそれが含まれる野菜の種類について学ぶセッションを実施。少女たちは日々の食事のメニューを考える際に役立てている。ルプノゴル・センターでは 2008 年 10 月から開始。

性教育: 大人からの性的な誘惑を避けるための「良いタッチ・悪いタッチ」研修、思春期の少女たちの身体に起こる変化とその意味について学ぶセッションを実施。センシティブな内容ではあるが、セッションを続けるにつれ、少女たち(特に年長者)は恥ずかしがるよりもむしろ生じた変化を教師と共有するようになってきており、センター開設当初とは大きく行動が変わってきている。

(2)スキルトレーニング

家事講習: 食器洗いから衣類の洗濯、扇風機や冷蔵庫の掃除、部屋の清掃等の方法について学ぶセッションを行った。プラスアルファのセッションでは浄水フィルターの清掃や家具の清掃方法についてのトレーニングも実施。少女たちがこれらを実践した雇用先や家庭ではとても評価が高く、何人かの少女は同じ労働条件で雇用主から給与を増額してもらうことができた。

アイロン掛け講習: 綿やリネン、絹等異なる素材へのアイロン掛けを行う際の温度設定の方法や、ベッドカバーや衣類へのアイロン掛けの方法を学び、上手にアイロン掛けが出来るようになった。

刺しゅう講習: チェーンステッチやクロスステッチ等、何種類かのステッチを学んでおり、何人かの少女は枕に刺しゅうをする、自分で刺しゅうを施した服を着てセンターにやってくるなどしている。また基本的な技術であるボタンの縫いつけや、痛んだ服の修繕方法についてもトレーニングを実施した。

料理講習: 米の価格が日々上昇し続けており、満身に食事が摂れないまま少女たちがセンター(特にコライル・センター)にやってくる状況が続いたため、栄養について教えるセッションを工夫し、「安くておいしく、栄養のある食事の調理法」をデモンストレーション入りで教え、デモとして作った料理を少しずつ子どもたちに食べさせる、という活動を何度か実施した。子どもたちには好評で、何人かは実際に自分の家で料理を作っていた。またパイクパラ、コライルにて住民たちの協力(寄付)を得て料理実習のフォローアップを兼ねたイフタールパーティ(イフタール=断食明

けの食事)を実施。少女たちが料理実習で習ったアイテムを作り、自分たちで食べた。

(3)レクリエーション活動

絵や歌、踊りなどを楽しむセッションで、なかなか自由な時間が与えられない家事使用人として働く少女たちにとって貴重な楽しみであり、子どもたちが最も「子どもらしく」過ごせる時間となった。少女たちの絵、歌、踊りは少しずつ上達してきており、2人の少女が世界保健デーに行われたバングラデシュ・シシユアカデミー(児童協会)主催のアート・コンペティションに参加した。

(4)貯蓄勸奨

保険も退職金制度も何もない少女たちの将来のため、雇い主に給料とは別に少しずつ貯金してもらおうための働きかけを2008年8月から開始。10月時点で少額ながら5人の少女たちの貯蓄がなされるようになった。

(5)縫製トレーニング

基本的な教育セッションをすべて修了した少女たちを対象に、少女たち自身や雇い主からも要望の強かったミシンを使った縫製トレーニングを開始。パイクパラ、コライル両センターにてミシンを購入し、パイクパラ・センターでは7月初旬から午前中にクラスを開始した。

II. ワークショップ

少女ドメスティックワーカーの問題への取組みはバングラデシュ国内でも先進的なもので、かつ家庭のプライバシーに関わる分野であることから、地域住民、特に雇用主の抵抗は大きい。また、親の無理解なども大きな障害となっている。こうした少女をとりまく環境に、ワークショップを通じて働きかけることで意識の変革を促し、「子どもを使用人として送り出さない・受入れない」ことが当たり前となる社会の実現へアプローチすることが狙いである。当プログラムを通じて直に接することが出来る人数は限られているものの、ワークショップやミーティング、プロジェクトを通じて自信をつけた少女たちの姿を通して、態度や考え方が大きく変わった雇い主や地域住民が出てきており、「少しずつでも社会は変えていける」との希望を持てるようになってきている。

女性雇用主とのワークショップ: 昨年度までに女性雇い主(既にセンターに少女を送っている人、そうでない人、あるいはこれから新しい家事使用人を雇おうとしている人も含む)を対象としたワークショップを行ってきたが、そのフォローアップのためのワークショップを7月30日にパイクパラ・センターにて実施した。ワークショップの主たる目的は担当職員の産休と、その代替要員の紹介、および少女たちの現状についてのディスカッションや写真展示による取組み内容の紹介であった。センターでの取り組みの写真展示はかねてから要望を受けていたものであり、ワークショップに参加した20名の女性雇い主に大変好評であった。また、センターに通い始めたばかりの少女の雇い主からは「働きが良くない、言うことを聞かない」等の不満の声が上がる一方、長くセンターに通っている少女の雇い主からは少女たちが進歩してきたことに対する感謝の声が聞かれた。このことから徐々にセンターでの活動が評価され、理解と信頼が深まってきていることが伺える。

住民委員会とのミーティング: ルプノゴル・センターの新規開設に伴い、8月2日にセンターの活動を紹介するためのミーティングを実施した。ミーティングには地元のコミュニティからおおよそ55名の参加があった。参加者の中には教師、勤め人、主婦等も含まれており、地域の関心は非常に強い。また、参加者の中からは「非常に新しくかつユニークな取組み」であるといった意見が出ており、ミーティングの最後にはプログラムが成功するよう祈りを捧げる時間がとられるなど、極めて協力的な関係が築かれている。

Ⅲ. 記録と文書化

家事使用人として働く少女たちの問題について、より多くの人々の意識を喚起していくため、新聞等のメディアに少女たちの声などの記事を掲載してもらえよう働きかけを行った。10月には Phulki(フルキ)の職員が英字紙を含む新聞社7社を訪問。少女たちについての記事を載せることについて全社の同意を得ることが出来た。協力的な雇い主に書いてもらった文章や少女たちが書いた文章、ケーススタディなどを提供し、記事にしてもらうよう働きかけを続けている。さらに2社訪問予定であり、今後はテレビ関係にも当たっていく。

なお、メディアや関連 NGO、ドナーなどを招いて少女たちの状況や Phulki(フルキ)の活動について紹介し、意見交換するワークショップは予定を延期し、2009年1月ごろ実施する予定。

【今後の課題】

この一年を振り返ると、貯蓄勸奨や縫製トレーニング等、新たな活動を取り入れ、さらに昨年度は実施できなかったマスメディアへの働きかけを行うなど、活動の質をより高めることができたと考えている。住民の協力の下で新たなセンターを開設し、より多くの少女たちに支援の機会を提供できるようになったことも大きな成果であった。

しかしそもそも住み込みで使用人として働く少女たちは農村部から都市部に働きに出されている。これは親の多くが自分たちの収入だけでは食べていけないための苦渋の選択であるが、送り出された少女たちを待受ける危険(雇用先での暴力、人身売買の被害など)に対する理解が浅いことも都市部に送り出させる要因の一つとなっている。

そこで今後は農村部の貧しい親たちにこうした危険を周知し、かつ子どもたちを働かせずに済むよう親の収入向上を図っていくことが必要だと考えている。

また都市部においても、雇用先での暴力事件で特に悲惨なものが中流階級から上流階級の家庭で起こっていることにも着目する必要があると考える。医師、弁護士、高級官僚など世間的には尊敬される職業につく人々の妻が、信じられないような暴力をふるっていたケースが多数報道されている。この背景には、一部の上流階級の主婦たち自身のフラストレーションがあるのではないかと考えられる。非常に困難ではあるものの、上流階級の女性たちを対象とした取組みを行っていくことも今後の大きな課題である。